

魂の故郷に立ち返り、主と共に歩む

創世記 31 章 1 節～21 節

2025 年 7 月 13 日

松田 基子師

聖書は私たちに「**神様は共におられる**」ということ語り続けています。私たちは神様のその宣言に対して、これを信じ、この一事に懸けていけるかどうか問われています。

神様がそのことを示すために選ばれたアブラハムの系譜は、アブラハムからイサクへ、そしてヤコブへと受け継がれて来ました。しかし、ヤコブは弟であり、社会通念としてはその権利は、男子の長子である兄エサウに与えられるべきものでした。

ヤコブはその事に納得できませんでした。ヤコブは、父イサクが年老いて目が不自由になり、家督継承の時が来ると、母の策略でもありましたが、兄エサウになりすまし、父を騙して神の祝福が伴うアブラハム系譜の家督権を横取りしました。

結果、兄エサウから殺意を抱かれる程の恨みを買って、伯父ラバンの許(もと)に逃亡せざるを得ませんでした。

ところで、神様は、エサウ、ヤコブの双子が母の胎にある時から弟を選ばれたと言われているのですが、どうしてこのような悪をお許しになったのでしょうか？その疑問が湧いてきます。

神様は決して罪や悪を不問にされるのではありません。神様は人間の愚かさを良くご存知です。それと共に憐れみ深く、忍耐強いお方です。神様は長い年月をかけて訓練を与え、本人がその罪に気づき、神様に悔い改め、罪を償う責任を取るよう導かれるのです。そのようにして、人生の歩みが決まってくるのは、本人の意志ではなく、神様であり、人は神様が共におられることを信じて、神様につながる人生を歩まなければ意味がないこ

とを教えられますのです。

さて、ヤコブは父の家を離れて旅の一夜、兄エサウに対する恐怖ばかりではなく、荒涼とした荒野の一人旅の不安と孤独に心しおれ、疲れ果てて眠ってしまいましたが、その夜、神様はどん底のヤコブに夢の中で現れ

「**見よ、わたしはあなたと共にいる。あなたがどこへ行っても、わたしはあなたを守り、必ずこの土地に連れ帰る。わたしはあなたに約束したことを果たすまで決して見捨てない**」(28 章 15 節)と言われました。

ヤコブは神様の顕現に、感動と畏敬の念に満たされ、枕にしていた石を立てて、神の力のしるしである油を注ぎ、その所を**ベテル(神の家)**と命名して神様を礼拝しました。

ヤコブはそれ以後の人生を、神様が「**わたしはあなたと共にいる**」と言われたこの言葉を握って疑わず、この一事に懸けました。そのことによって、彼の信仰と品性は練られて行きました。

しかしそれは、簡単な、楽な人生ではありませんでした。

さて、ヤコブは父の家から伯父ラバンの家まで約 800 キロの一人旅を、幾多の困難に遭いながらも、神様が共におられることを力として歩き続け、神様に守られてラバンの許に辿り着くことができました。

ヤコブはラバンの下で一生懸命に働きました。ラバンはヤコブの働きぶりを見て、とても気に入りました。ひと月程経つと、ラバンは機嫌良く、ヤコブに「**お前は身内の者だからといって、ただで働くことはない。どんな報酬が欲しいか言ってみなさい**」と言ってくれたのです。

ヤコブは父イサクから「**ラバンの娘の中から結婚相手を見つけなさい**」と言って送り出されて来たのでした。ヤコブはラバンの下の娘、ラケルに心惹かれていました。

ヤコブはラバンに「下の娘のラケルをくださるなら、わたしは7年間あなたの所で働きます」と申し出ました。ラバンからは「あの娘をほかの人に嫁がせるより、お前に嫁がせる方が良い。わたしの所にいなさい」といかにも好意的な答えが返ってきましたが、このラバンはしたたかな人間でした。彼にとっては財を増やすことが人生の目的であり、そのためには相手を欺くことは自分の手腕のように思っている人でした。

ヤコブはこの後20年間、ラバンの考えに翻弄されることになるのですが、それは又、ヤコブが訓練されていくことになりました。

さて、7年の年季が明けると、ラバンはヤコブと娘の結婚の祝宴を盛大に開きました。そして彼は酔いつぶれたヤコブの許に姉娘レアを送り込んで、レアとの結婚を成立させたのです。

翌日、ヤコブはラバンに対して怒り、抗議しました。するとラバンは「我々の所では、妹を姉より先に嫁がせることはしないのだ。一週間の婚礼の祝いを済ませたら、妹の方もお前に嫁がせよう。だからもう7年間花嫁料として働いてもらわねばならない」と言ったのです。ラバンは、してやったり、とヤコブを上手く騙したのです。

ヤコブはラバンの欺きに、その卑劣なやり方に怒りがこみ上げて来て、悔しくてたまりませんでした。

と同時に心が痛みました。兄エサウの長子の権利を横取りし、そのために誠実な父を騙したのです。自分に与えられると信じていた家督権を、ヤコブに奪われたエサウの悔しさと怒りは、ヤコブに殺意を抱くほどのものでした。その結果、自分は今、伯父ラバンの許に逃れて来て、今度は自分が騙されたのです。自分のやったことは、兄エサウにこれ程の悔しさ、苦しみを与えたのだということが分かりました。

人は誰も自分が加害者である時は、相手にどれ

程の苦しみを与えているか分からないものです。自分が被害者になって初めて、その悔しさ、苦しみ、痛みを体験しますが、自分も又、別の人に対して加害者であったことが思い起こされるのです。と同時に、かつての自分のその考え、行為が神様に対する背き、つまり罪であったことに気付くのです。

ヤコブは過去の罪を示され、神様の前に悔い改めたに違いありません。

レアとの一週間に及ぶ婚宴期間が過ぎると、ラバンは2人の娘にそれぞれ女性奴隷を与えて娘たちを嫁がせました。ヤコブの許には一どきに、4人の女性を取り巻くことになりました。

レアは父に利用され、その上ヤコブの本命ではなかったために、愛を受けられず、子供を産むことに自分の存在価値を求めました。そのために血を分けた妹ラケルとの間で、嫉妬し合う女性の戦いが続きました。ヤコブは複雑な家族関係に悩まされることになります。

ヤコブには14年の年季が明けると、レアとの間に6人の子ども、レアとラケルの戦いに利用された2人の女性奴隷から生まれた4人の子ども、そしてラケルにもやっと一人の男の子ヨセフが与えられ、子どもは合わせて11人になっていました。大所帯になり、独立して一家を構えたい気持ちでした。

そこでヤコブはラバンに

「わたしを独り立ちさせて、生まれ故郷へ帰らせてください。あなたのために、わたしがどんなに尽くしてきたか、良くご存知のはずです」と申し出ました。

するとラバンは「もしお前さえ良ければ、もっといてほしいのだが。実は占いで、わたしはお前のお陰で、主から祝福を頂いていることが分かったのだ。お前の望む報酬をはっきり言いなさい。必ず支払うから」との条件を持ち出して引き留

めました。

ヤコブはラバンのずるさに不満を抱きながらも「**それではぶちとまだらと黒みがかった羊、そしてまだらとぶちの山羊をくださるのならもう一度あなたのもとで働きましょう**」と答えました。

ラバンはヤコブを引き留めるために、その報酬を約束したのですが、彼はヤコブが去ると、その日のうちに該当するものの中から欲しい羊と山羊を取り分けて、自分の悪事を隠すために、ヤコブの群れと自分の群れを三日間歩く距離ほど離しました。

ラバンは人間のずる賢さを持ってヤコブをどこまでも利用しました。自分の財を増やすことだけが彼の目的でした。

ヤコブはラバンの卑劣なやり方に抗議し争うこともできました、しかし自分の、エサウと父に対する罪を示されて、一切を神様に委ねました。

ヤコブはただ「**わたしはあなたと共にいる**」と言われた神様が、常に見守ってくださることを信じました。

ラバンは相変わらず、ずるい方法で、ヤコブの報酬を少しでも少なくすることばかりを考えました。

ヤコブはそんなラバンの仕打ちになされるままに従ったわけではありません。彼は彼で長年の羊と山羊の繁殖努力を駆使して、自分への報酬として決められた、しまやぶちやまだらの羊や山羊の子が、元気で沢山生まれるようにしました。勿論そこには神様の助けと働きがありました。

報酬契約から6年。ヤコブの羊や山羊はどんどん増えていきました。約束の報酬であり、ラバンも異議を唱えることができず、ただ腹立たしいだけでした。

腹立たしかったのは、ラバンだけではありません。その息子たちはヤコブを非難しました「**ヤコブは我々の父のものを全部奪ってしまった。父の**

ものをごまかして、あの富を築き上げたのだ」と周りに言いふらしていました。

ラバンはラバンで、やはりヤコブは自分の羊や山羊を使って富を築き、今や富む者となった、何と恩知らずな、と言う怒りがこみ上げて来て、ヤコブと冷静に会話することが出来ない状態になっていました。

ヤコブはうつうつとしていました。そんなヤコブに神様は呼びかけられました。

「**あなたは、あなたの故郷である先祖の土地に帰りなさい。わたしはあなたと共にいる**」(31章3節)との御声でした。

ヤコブはラバンの下にいる限り、彼の報酬に支配される生活です。ラバンの人生の目的は、当時の財産である家畜を限りなく持つことでした。そのために人を騙し、人を利用し、物で人をはかる生き方をしていました。それは持てる者と比べ合い、他者を踏み台にする生き方でした。ヤコブ自身も、かつては兄エサウから家督権を奪った、支配と物に価値を置いた人間でした。

しかし、神様を見上げる生き方に変わった時、神様に期待する人生に変わりました。そのヤコブに対して憐れみ深い神様は、

「**ラバンのあなたに対する仕打ちは、すべてわたしには分かっている**」(31章12節)と言われたのです。

神様がどれ程ヤコブを見守り、味方し続けてくださったかが分かります。神様が必ず最善に導いて下さるのです。ヤコブを導いておられる神様は

「**わたしはベテルの神である。かつてあなたは、そこに記念碑を立てて油を注ぎ、わたしに誓願を立てたではないか。さあ、今すぐこの土地を出て、あなたの故郷に帰りなさい**」(31章13節)と言われました。

それは神様と共なる生活、神様中心の生活をす

るため、ラバンの下での生活から抜け出て、神様と共に、神様に聞き従って、神様の目的のために生きる。神様礼拝中心の生活基盤を築きなさい、との勧めです。この事こそ神様がヤコブを選び導き続けてこられた理由でした。

ヤコブはこの後、ラバンのすきをついて全家族、全財産を携えて帰郷の途に就くのでした。ラバンに追いかけられますが、神様の介入によって、平和裡にカナンの地に向かうのでした。

私たちも今、何を目的として人生の旅路を生きているでしょうか。地上の旅路を生き抜いて行くためには、勿論、生活の資を得る手立ては必要です。しかしそれ以上に大事なことは、第一のものを第一にすることです。ついよそ見をして道を逸れてはなりません。

イエス様はマタイによる福音書6章24節で

「だれも、二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない」と言われました。

私たちの生きている社会は、ラバンの価値観で満ちています。私たちは用心していないとラバンの価値観に染まってしまう。その空しさは地上を去って行く時に、はっきりと分かるのですが、それでは手遅れです。人生の目的は、自分の命の与え主である神様の支配の下で、地上の旅路を神様に導かれて共に歩き、真の故郷である天の故郷に帰り着くことです。

そのためには**「わたしはあなたと共にいる」**と言ってくださる御言葉の力強さと、助けを信じて、神様を礼拝しつつ、神様の御心を聞き、導きに従って生きることです。

しかし、私たちは与えられた人生の旅路をいつの間にか度々、迷い出てしまいます。その度に神様は**「あなたの魂の故郷に帰りなさい」**と呼びか

けてくださいます。

今日、私たちには、神様に聞き従う道を教えてくれる聖書が与えられています。神様の御心を求めながら、聖書の言葉が解き明かされている所が教会です。私たちは教会に連なり、聖書のことはに聞き、そこから神様の求めと導きに従って生きるなら、ヤコブ同様、罪深い私たちであっても、御子イエス・キリストの十字架の贖いによる赦しをいただいて罪赦され、神共にいますことが、より具体的に分かるように、イエス・キリストが永遠の同伴者となって御国まで導いて下さるのです。

私たちの最終到着地は天の故郷ですが、地上の旅路の途上にあっては、ベテルすなわち、神の家、天国の門である教会で、神様を礼拝し続けるのです。

教会を魂の故郷とする生涯を歩み抜いて、真の魂の故郷である天国に導いていただきましょう。

お祈り致します。

忍耐強く私たちを愛し導いて下さる天の父なる神様。常に私たちを愛し、見守って下さり、ありがとうございます。迷い出た時は魂の故郷に立ち帰りなさいと御声を懸けて下さいます。その御声にしっかりと聞き従い、主と共に地上の旅路を歩み抜き、真の故郷である天国に辿り着く者とならせて下さい。

救い主イエス・キリストの聖名によってお祈り致します。アーメン。